愛知県立大学看護学部紀要 Vol. 24, 11 − 21, 2018

■ 総　説 ■

活動理論を理論的背景とした国内先行研究における学習の場と活動理論の活用方法に関する文献検討

岡島　規子[1]

A literature review of activity theory, and learning activity settings

Noriko Okajima[1]

本研究の目的は，看護基礎教育における活動理論の活用可能性を探るために，どのような学習の場において，どのように活動理論が活用されているかを明らかにすることである．医学中央雑誌Web（Ver. 5）及びCiNiiを用いて，2011年から2018年に発表された先行研究24件を対象に，活動理論が活用された学習の場，活用方法から分析した．結果，活動理論は「学校」で多く活用され，なかでも大学や小学校で活用が多い傾向にあった．一方，活動理論の活用方法は，「分析」への活用が多く，次いで「授業やセッションまたは研修会等の企画・運営」であった．看護教育の対象文献5件のうち，看護基礎教育では「授業設計」と「考察」に活動理論の理論的枠組みを活用したものが1件ずつと少なかったが，活動理論を活用する有用性が示されており，看護基礎教育での学習活動の分析や授業設計等における活動理論の活用可能性を検討する必要性が示唆された．

キーワード：活動理論，活動システム，学習

Ⅰ．はじめに

看護を取り巻く状況は変化し，看護基礎教育の質を高めることが求められている．つまり，学生の主体的，能動的な学習への支援が重要視されている．「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」（厚生労働省，2007），「看護教育の内容と方法に関する検討会」（厚生労働省，2011），「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（中央教育審議会答申，2012）においても，学生の主体的に学ぶ力や判断する力，問題解決能力を育成することを意図している．これらの力を育成するためには，看護教員の質の向上，すなわち，学生の主体的，能動的な学習を支援できる能力も高める必要がある．看護教員は「教える人」から「ファシリテーター」へと転換し，「学習のカリキュラム」（Lave & Wenger, 1991）への支援者の役割を果たさなければならない．つまり，授業実践は学生と教員が協働して創造するものであるといえ，このような学習活動における質的な転換や授業の工夫への手がかりのひとつとして，活動理論（Engeström，翻訳．1999）の授業実践への活用がある．

活動理論（Engeström, 翻訳．1999）は，エンゲストロームが，Vygotsky（1978）の「行為への媒介」のアイデアと，レオンチョフ（Leont'ev，翻訳．1980）の「集団的活動」の概念を発展させたものである．活動理論において，エンゲストローム（Engeström，翻訳．1999）は，集団の協働的な活動を可視化する，「活動システムモデル」を提案した．活動システムモデルでは，主体となる学習者がツールや記号等の「媒介する人工物」を用いて，目的や動機である「対象」に向かう活動を表している（図1）．エンゲストロームの活動理論（Engeström，翻訳．1999）は，中心的なコンセプトに「拡張的学習」を置いた学習理論であり，1999年に初めて日本で紹介された．

エンゲストローム（Engeström，翻訳．1999）は，学習

[1]愛知県立大学大学院看護学研究科

活動は，「いくつかの行為群からひとつの新たな活動への拡張を習得すること」であると述べる．また，Greeno, Collins, & Resnick（1998）は，活動理論における学習は，主体が技術や知識の習得を通じて，活動システムへの参加の仕方を変えていくことであると述べている．つまり，学習活動は，システム内のコミュニティ，ルール，分業，媒介する人工物との関わりを変化させながら，対象（目的や動機）をめざして活動を行い，学習成果へと導くものであるといえる．

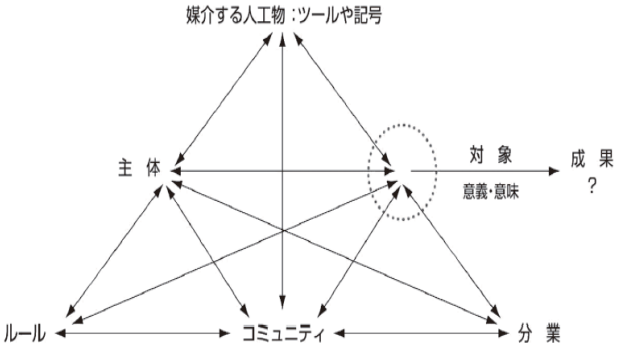

図１　活動システムの一般モデル（山住, 2015 より引用）

山住（2015）は，「ある特定の授業実践はシステムを構成する諸要素間の有機的な相互関連や内的な一貫性によって，具体的に生み出されている」と述べ，また，学習活動を「対象，ツールや記号等の諸手段，コミュニティ，ルール，分業といったシステム・レベルでの構造的な諸要因と多元的に関連づけてダイナミックに説明する」と述べている．つまり，学習活動をシステム・レベルで捉えることにより，学習者がどのようなツール等の諸手段を利用して対象（目的）に向かうのか，「コミュニティ」「ルール」「分業」といった社会的な諸要素がどのように関与しているのかを浮かびあがらせることができる．したがって，活動理論の枠組みは授業実践を分析する枠組みとして有用であるといえる．

看護基礎教育では，演習や実習の場の状況に応じて，思考し判断して行動する主体的な学習活動が求められる．特に，臨地実習では，看護学領域及び実習施設によって，受け持ち患者や，「コミュニティ」「ルール」「分業」といった社会的な要素が，以前の経験と異なる様相で学習者に関与する．このような学習活動における教育的関わりでは，学生が「何をどのようにして学んでいるのか」を捉えることが必要となる．現在，学生の主体的な学習を高める取り組みとして，アクティブ・ラーニングやシミュレーション教育等の導入が推進されているが，学習の場や使用するツール，学習活動に関与するルール，仲間や教員が変われば，当然ながら学習活動も変容するため，学習者の学習活動の状況を分析することが効果的な介入につながる．

18歳人口の再減少の渦中にある今，高等教育では「個々人の強みを最大限に活かすことを可能とする教育」への転換を行っていくことが必要である（文部科学省，2018）．看護基礎教育はこのような状況のなかで，高等教育かつ専門職教育として，学生が主体的な学びで「何を学んで，何を身につけたのか」を明示できるような質の高い教育への取り組みが早急に要求されている．そのためには，学生の学習活動を分析し，それに応じカリキュラムや学習内容及び方法の推進あるいは改良が重要であり，この手段のひとつとして，学習活動における活動理論の理論的枠組みの活用は相応しいと考える．看護基礎教育において活動理論を援用した研究には，酒井（2000）の手術室見学（患者体験）と手術室入室実習における学生の学びの状況を明らかにしたものがあるが，未だ十分に活用されているとはいえない．

そこで，本研究では2011年から2018年までの活動理論を理論的背景とする国内文献において，どのような学習の場における活動が行われ，研究においてどのように活動理論が活用されているかを明らかにし，看護基礎教育における活動理論の活用可能性を検討したいと考えた．

Ⅱ．研究方法

1．文献の検索方法

医学中央雑誌Web（Ver. 5）及びCiNiiを用いて，「活動理論」「活動システム」「学習」をキーワードとし，これらのキーワードを掛け合わせて絞り込みを行い，2011年から2018年9月までに発表された国内文献を検索した．解説・総説，文献レビュー，会議録，2種の検索ツールの結果で重複があった文献を除外した結果，45件が抽出された．次に，文献の内容を精読し，活動理論を理論的背景としたもの，国内の学校及び職場における学習活動を分析したものを対象文献として採用した．

2．2011年から2018年の間の文献を取り扱う理由

文献検索の対象とした2011年から2018年の間は，教育基本法改正（2006），学校基本法改正（2007）を受けて改

訂された学習指導要領(2008)に基づき，授業方法や内容が検討された時期と考えたこと，大学教育では「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(中央教育審議会答申，2012)で，主体的な学修を支える教育方法が求められた時期と考えたためである．また，この時期に，看護教育では「保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部を改正する省令」(文部科学省・厚生労働省令1，2008)が交付され，2009年度入学生から新カリキュラムが適用されたこと，「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」(厚生労働省，2011)において看護師教育における教育内容と方法が検討されたこと，看護継続教育では「新人看護職員研修に関する検討会報告書」(厚生労働省，2011)等が報告された時期に相当するため，分析する期間として適当であると考えた．

3．分析方法

活動理論がどのような学習の場において，どのように活用されているかを検討するために，対象文献を精読し，内容から研究対象となった学習活動が行われていた「学習の場」及び，対象文献における「活動理論の活用方法」について分類・整理した．「学習の場」は各研究で焦点があてられている学習活動を，学校と学校以外に分け，内訳を整理した．「活動理論の活用方法」は，大きくは，プロジェクト等の実践を学習理論の枠組みを用いて振り返って分析しているもの(「分析に活動理論の枠組みを活用」)と，活動理論の枠組みを活用して学習活動を企画・展開したプロセス等を検討しているものに分類した．また，発表年，研究目的，研究方法，研究参加者から対象文献における研究の動向をみた．

Ⅲ．結　　果

抽出された24文献を対象文献とした(表1)．

1．研究の動向

1)研究の年次推移

対象文献の発行年別の件数数は，2014年は6件と最も多く，次いで2011件は5件であった(表1, 2, 3)．2012年，2016年，2017年は3件ずつで，2013年，2015年は各2件であった(表2)．

2)研究目的

研究目的からみると，最も多かったのは「学習経験・学習プロセスを明らかにすること」が14件で，次いで「授業・研修会の設計・評価」5件，「教材開発・評価」3件，「学習支援の視点の明確化」2件であった(表2)．

3)研究方法

質的研究が20件と大半を占めており，質的研究と量的研究の併用は3件，量的研究は1件であった(表2)．

4)研究対象者

「生徒または学生」が12件と最も多く，次いで，「教師」「看護師」が各4件ずつであった(表2)．対象が複数であったのは4件で，「生徒と学生及び教員」が2件，「生徒と学生」1件，「生徒と教員」1件であった(表2)．

5)看護基礎教育における対象文献からの知見

対象文献のなかで看護基礎教育に関するものは2件であった(表3～5)．

渋谷他(2016)は，活動理論を理論的背景として，学内実習に実際の患者に近い模擬患者(Simulated Patient：以下SPとする)への援助や，臨地実習指導者(以下，指導者)による指導に基づく援助の実施などを取り入れ，臨床と学校の境界をまたぐ学習の場としての技術演習を設計した．この技術演習の非介入型参加観察をした指導者に，演習後と実習後に面接調査を実施した結果，指導者は，SP活用の有用性や学生の様子の理解を経験し，実習につながる学習指導を考えることを経験していた．また，演習で観察した学生の様子や教員の指導を踏まえた実習指導の実施や，学校と臨床との違いを考慮して指導する等，実習指導に活用していた．

香川(2012)は，学内実習から臨地実習へ移動して展開される看護学生の学習過程について半構造化面接を行い，活動理論の理論的枠組みを活用して考察している．その結果，学内学習では教科書通りの実践にとどまっていた看護学生は，臨地実習での患者や看護師との相互行為を通して，教科書的知識を柔軟に変更しながら活用する道具と認識し，臨地実習での教科書の活用において学内とは異なった新しい意味を見いだしていたと報告していた．

2．対象文献における学習の場(表3～5)

対象文献を精読し，研究対象となった学習活動が行われていた「学習の場」を分類した結果，最も多かったのは「学校」で15件であった．内訳は，多い順に「大学」7件，「小

表１　対象論文一覧（n ＝ 24）

○表３に掲載した文献

1. 中村恵，古海忍，松村佳子（2011）．就学前教育における科学学習に関する研究．*奈良佐保短期大学研究紀要*，19，65−71.
2. 米澤奈甫子（2014）．学び合いを生かす授業方法に関する研究：算数科における道具とルールに着目した支援．*奈良教育大学教職大学院研究紀要*，6，1−10.
3. 大島律子，湯浅且敏，大島純，上田芳伸（2013）．グループ活動を形成的に分析・評価する授業デザインの検討．*日本育工学会論文誌*，37（1），23−34.
4. 松田岳士，松下佳代（2014）．活動理論に基づく教育実践のデザイン：「胚細胞モデル」を用いた新たなインストラクショナルデザインの試み．*日本教育工学会論文誌*，37（4），521−528.
5. 澁谷幸，柴田しおり，玉田雅美，後藤由紀子，江口由佳，堀田直孝，……谷川千佳子（2016）．模擬患者参加型技術演習に参加した臨地実習指導者の経験：学校 - 臨床間をつなぐ学習の場としての看護技術演習の可能性．*日本看護学教育学会誌*，26（2），69−81.
6. 森山潤，宮崎啓，中原久志，勝本敦洋，阪東哲也，萩嶺直孝（2015）．活動システムのモデルに基づく ICT 授業活用の実践解釈と教員研修への応用可能性の検討．*兵庫教育大学学校教育学研究*，28，1−9.
7. 田口真奈，松下佳代，半澤礼之（2011）．大学授業における教授のデザインとリフレクションのためのワークシートの開発．*日本教育工学会論文誌*，35（3），269−277.
8. 加登本仁（2014）．研究授業を担当する若手教師が直面する困難とその克服過程に関する活動理論的考察．*初等教育カリキュラム研究*，（2），13−21.
9. 加登本仁，大後戸一樹，木原成一郎（2014）．小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関す事例研究．*教育方法学研究*，39，83−94.
10. 森薫（2016）．となえうたの教材化に関する基礎的検討：「どれにしようかな」の採集調査と「活動理論」をふまえて．*教材学研究*，27，159−170.
11. 白土厚子（2017）．教師の協働によるプロジェクト重視の小学校英語活動：活動理論の視点からその実践を検証する．*津田塾大学紀要*，（49），295−304.
12. 佐藤瑞紀（2017）．協同性において生じる対象との出会いの検証：活動理論の視点から．*山形大学大学院教育実践研究科年報*，8，222−225.
13. 辻高明（2011）．大学授業における映像制作実習への活動理論的アプローチ．*協同と教育*，（7），35−46.
14. 大木誠一，筒井洋一（2014）．大学外からの授業参加者が学びを変える：横越境的で水平的な結びつきから創出する学びあい．*コンピュータ＆エデュケーション*，37，79−84.
15. 香川秀太（2012）．看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」の発達．*教育心理学研究*，60（2），167−185.

○表４に掲載した文献

16. 今野貴之（2013）．教師の授業について信念と国際交流学習のデザインに関する研究．*日本教育工学会研究報告集*，2013（3），141−146.
17. 石上浩美，大仲政憲，高橋登（2011）．稲作体験活動への参加による学び．*こども環境学研究*，7（1），79−85.
18. 伊藤大輔，稲葉光行（2014）．子どもを中心とした地域創造のための協働学習：平成 25 年度八幡子ども会議の事例を中心に．*日本教育工学会研究報告集*，14（1），277−284.
19. 今野貴之，岸磨貴子，久保田賢一（2011）．活動理論から見た知識生産の新しい様式とその実践．*日本教育工学会論文誌*，35，173−176.
20. 石上浩美，高橋登，大仲政憲（2012）．教員志望大学生の体験による学び．*大阪教育大学紀要 第４部門 教育科学*，61（1），117−130.

○表５に掲載した文献

21. 木下朋子，八木夏紀，福岡富子（2012）．活動理論を用いた効果的なリーダーシップ研修の検討：看護師長の支援のあり方を探る．*日本看護学会論文集 看護管理*，42，107−110.
22. 榛葉益枝，加藤和子，加藤千明（2015）．卒後から，一人前ナースになるまでの学習過程（その１）．*常葉大学健康科学部研究報告集*，2（1），19−28.
23. 香川秀太，澁谷幸，三谷理恵，中岡亜希子（2016）．「越境的対話」を通した新人看護師教育システムの協働的な知識創造：活動理論に基づくアクションリサーチと対話過程の分析．*認知科学*，23（4），355−376.
24. 古川由美子（2017）．日本語教師の悩みとその変容：他機関に所属する教師同士の対話の効果．*言語教育研究*，（7），11−21.

表２　先行研究の主な傾向

項目		文献数
発行年	2011 年	5
	2012 年	3
	2013 年	2
	2014 年	6
	2015 年	2
	2016 年	3
	2017 年	3
研究目的	学習経験・学習プロセスを明らかにする	14
	授業・研修会の設計・評価	5
	教材開発・評価	3
	学習支援の視点の明確化	2
研究方法	質的研究	20
	質的研究と量的研究	3
	量的研究	1
研究対象	生徒または学生	12
	教師	4
	看護師	4
	生徒と学生及び教員	2
	生徒と学生	1
	生徒と教員	1

学校」6件であり，「幼稚園」「研修会」はそれぞれ1件ずつであった．「学校」における授業に関するものは14件あったが，このうち，看護基礎教育に関する文献は2件のみであった．次に，学習の場が「課外活動」のものは5件で，国際交流学習や稲作体験，地域と連携した活動があげられていた．「学校以外の場」が学習の場であったものは4件で，このうち，「職場での学習」が3件，「同職種間の対話」に注目したものが1件であった．「職場での学習」の3件はすべて看護師を対象としたものであった．

3. 対象文献における活動理論の活用方法（表３～５）

対象文献を精読し活動理論が対象文献においてどのように活用されているかを分類した結果，最も多かったのは研究における「分析」に活動理論の理論的枠組みを活用したものが11件で，次いで，「授業やセッションまたは研修会等の企画・運営」8件であった．

表３　学習の場と活動理論の活用方法に関する文献の概要【学習の場が「学校」である文献の概要 n=16】

1. 活動理論を教育プログラムの企画・実践に活用した研究

文献番号	著者，発表年	論文種類	研究テーマ	学習の場	活動理論の活用方法	研究目的	対　象	研究方法	主な結果
1	中村他，2011	記載なし	就学前教育における科学学習に関する研究	幼稚園授業	授業設計	遊びによる発見や学びが科学的思考を高める学習であると気づく素地を育む．	幼稚園年長クラス（人数不明）	アクションリサーチ	「本物」をツールとして用いることにより，事象に関わる際に子どもが注目する部分や，考えようとする姿勢の変化がみられた．
2	米澤，2014	記載なし	学び合いを生かす授業方法に関する研究：算数科における道具とルールに着目した支援	小学校授業	授業設計	児童が学び合いを通して学習内容を理解・習得できる授業を行う学習支援の視点を探究する．	算数科の授業実践 第５学年 32 名	「道具」「ルール」の視点で学び合い支援の工夫を実施	道具とルールの視点からの支援は，学び合いを通しての学習内容の理解・習得に役立った．個人の解決場面でルールがうまく機能しなかった場合，学び合いの場面でもルールはうまく機能しなかった．
3	大島他，2013	教育実践研究論文	グループ活動を形成的に分析・評価する授業デザインの検討	大学授業	評価指標の作成	授業デザインの変更が「グループ活動の評価指標の理解向上」を導いたかを明らかにする．	学習目標の理解度調査提出者（第１年度 49 名，第２年度 61 名）	学習支援システムのノート，発表得点，理解度調査，出欠状況，授業観察記録，授業後ミーティング記録を収集	評価指標の利用や学習目標の理解は前年度に比べ向上し，学習者の主体性は向上した．プロジェクト成果物の質に必ずしも理解の程度は反映しなかった．
4	松田他，2014	寄書	活動理論に基づく教育実践のデザイン：「胚細胞モデル」を用いた新たなインストラクショナルデザインの試み	大学授業	授業設計	活動理論が高等教育における教育実践に与える示唆を探る．	「雲から天気を読もう」の授業実践（人数不明）	活動理論に基づく授業デザイン設計と実践	ゴールから遡る授業デザインが，基本的な教授要素を認知的目標と対応させながら成長させる授業設計方法に変化し，探究的学習理論の６段階のステップが教授方法の選択に影響を与えた．
5	澁谷，2016	研究報告	模擬患者参加型技術演習に参加した臨地実習指導者の経験：学校 - 臨床間をつなぐ学習の場としての看護技術演習の可能性	大学授業	授業設計	SP 参加型技術演習に参加し，基礎看護学実習指導に関わった指導者の経験を明らかにする．	演習及び研究に参加した指導者４名	演習後フォーカスグループ面接，実習後個別面接	演習で「SP 活用の有効性に気づいた」「学生の様子がわかった」「実習につながる学習指導について考えた」ことを経験し，「演習での学生の様子を踏まえて指導した」「演習での教員の指導を踏まえて指導した」「学校と臨床との違いを考えて指導した」と実習指導に活用していた．
6	森山他，2015	記載なし	活動システムのモデルに基づく ICT 授業活用の実践解釈と教員研修への応用可能性の検討	大学院授業	教材	ICT 活用実践の解釈に活動システムモデル用いた教員研修の可能性を検討する．	「IT 授業実践ナビ」掲載実践事例 102 件，大学院生 55 名（ストレート 46 名，現職９名）	実践事例の類型化（数量化Ⅲ類），大学院の授業として教員研修を実施	活動システムモデルを用いたことにより，実践解釈とアイディア表現の容易性で受講生から高評価を得た．この傾向は現職教員院生の方が強く，活動システムモデル使用には授業実践経験が影響した．
7	田口他，2011	教育実践研究論文	大学授業における教授のデザインとリフレクションのためのワークシートの開発	研修会	ワークシートの開発	教授デザインとリフレクションのために開発したワークシートを適用した結果を検討する．	プレ FD プロジェクトの事後研修会参加者 15 名	講師用リフレクションシートの収集，研修事後質問紙調査	学生の学習の観点からの教授リフレクションは，教授機能を捉え直すこと，講義形式の授業を相対化し，多様な選択肢の存在の理解に有効であったが，今後の教授デザインの検討や多様な選択肢から根拠をもった選択，「探究的学習サイクル」を実現する一連の教授プロセスとして授業を捉えるには至らなかった．

2. 活動理論を用いて学習活動を分析・考察した研究

文献番号	著者，発表年	論文種類	研究テーマ	学習の場	活動理論の活用方法	研究目的	対　象	研究方法	主な結果
8	加登本，2014	記載なし	研究授業を担当する若手教師が直面する困難とその克服過程に関する活動理論的考察	小学校授業	分析に理論的枠組みを活用	若手教師が研究授業を担当して直面した困難と克服過程を考察する．	4年生担任の勤続5年目教師1名	非構造化面接，メール，電話，フィールドノート，授業構想時期と実施時の活動システムを分析	授業の構想時期の活動システムにはルールや分業に起因した道具の矛盾があった．道具やルール，分業の変容によって，児童の実態に合った授業を計画する結果を生み出した．
9	加登本他，2014	記載なし	小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関する事例研究：エンゲストロームの活動理論を手がかりとして	小学校授業	分析に理論的枠組みを活用	フラッグフットボールの授業で子どもがどのように学習集団を発展させていくのか明らかにする．	班内で能力の劣る子どもへの「排撃作用」があったA班4名	授業撮影，指導言と子どもの発話録音，ゲーム記録用紙，戦術的知識テスト（坂田他，2009），仲間づくり調査票（小松崎他，2003）	単元前半から後半にかけて，A班「活動システム」は肯定的な変容があり，影響要因は以下であった．①ボールを易しいものにし，基礎的なボール操作の技能を保障，②子どもの役割が明確でゲームで作戦が生かせる教材準備，③作戦修正時間を保障し，集団思考で戦術的知識を深める．④子どもの「内的矛盾」を把握し，対話を通した集団的解決をする．
10	森，2016	報告	となえうたの教材化に関する基礎的検討：「どれにしようかな」の採集調査と「活動理論」をふまえて	小学校授業	分析に理論的枠組みを活用	子ども達が日常的に使う「となえうた」の教材化の方法を検討する．	小学校7校の1～6学年の児童75名	子どものわらべうた実践を採集	76種類のとなえうた「どれにしようかな」が採集された．となえうたは①音程，②旋律法，③拍節の周期性と歌詞の配分ルールによって類型化された．
11	白土，2017	研究ノート	教師の協働によるプロジェクト重視の小学校英語活動：活動理論の視点からその実践を検証する	小学校授業	分析に理論的枠組みを活用	プロジェクト重視の英語活動での教師集団の協働の5年間の変化を明らかする．	授業の振返り記録，担任の学期毎自由記述，観察記録	担任と児童の授業振返り，担任の自由記述，観察記録（相互関係の変化をKJ法で分析，活動システム図を作成）	児童の変化を実感する中で，担任の活動への理解が深まり，ルールは筆者と担任が「一緒に考えながら実践する」に変化した．活動のアイデアや検討課題を担任も考えるようになり，主体は担任と筆者の両者になり分業も変化した．周囲の教師の理解も進み，コミュニティに加わった．
12	佐藤，2017	記載なし	協同性において生じる対象との出会いの検証：活動理論の視点から	小学校授業	理論的背景に活用	子どもの協同的な学びで，教師が子どもにどのような背伸びをさせられるのか，それが起こる状況や要因を探る．	「平行四辺形の面積を求める方法を考える」課題のグループ学習を行った4名	授業観察，授業実践事例を分析	分からない人が聞ける場へと変えることで諦めてしまう子が対象と向き合うチャンスを得ていた．重要なのは背伸びであり，1人では諦めてしまうが教師と一緒なら話してみることができた．教師との背伸びを契機に仲間と共に背伸びができ，自分がすべきことを探すことで参加活動は変化した．
13	辻，2011	教育実践研究論文	大学授業における映像制作実習への活動理論的アプローチ	大学授業	分析に理論的枠組みを活用	映画制作実習の協同学習で，学習者の道具使用の変化と他者との協力関係を明らかにする．	「映像制作論」グループ5名の実践事例，キーインフォーマント学生1名	参与観察，面接，作業報告ファイルの分析	「道具」使用で問題状況に直面した学習者は，他の学習者たちとグループの「分業」形態を見直し，共同で制作に取り組むようになった．「指定された機器を使う」というルールを変更し，利用可能な機器で作品を完成させ，既存の道具の「拡張的」使用や，周辺の機器の「発見的」使用を共同的に再構成していた．
14	大木他，2014	論文種類	大学外からの授業参加者が学びを変える：越境的で水平的な結びつきから創出する学びあい	大学授業	分析に理論的枠組みを使用	教室外の学びあいの場が授業参加者に与えた影響を述べる．	人文学部自由選択科目授業「グループワーク概論」受講者35名	授業後に他大学教職員がグループワークで授業評価．内容は見学者，教員，協力者，学生が分析	授業参加者間の関係を質的に変化させ，大学の制度的文脈を越えた学びあいの場を創りだした．学生は授業に能動的に参加し，殆どの学生が自ら変化成長したと認識できる場となった．
15	香川，2012	記載なし	看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」の発達	大学授業	考察に活動理論を活用	学内から臨地への状況間異動に伴う看護学生の学習過程を明らかにする．	4年制大学看護系学部に所属し，基礎看護実習後の2年生12名	学内授業観察，半構造化面接	看護学生は，学内実習では架空の患者との相互行為を通して，ほぼ教科書通りの実践にとどまった．臨地実習で本物の患者や看護師との学内と異なる相互行為を通して，教科書的知識を「現場の実践を批判的に見せるが柔軟に変更もすべき道具」と見なすように変化した．

表４　学習の場と活動理論の活用方法に関する文献の概要【学習の場が「課外活動」である文献 n＝4】

文献番号	著者，発表年	論文種類	研究テーマ	学習の場	活動理論の活用方法	研究目的	対　象	研究方法	主な結果
16	今野，2013	記載なし	教師の授業についての信念と国際交流学習のデザインに関する研究	小学校課外活動	分析に理論的枠組みを活用	国際交流学習を実践する教師が他の組織・団体とどのような水平的な紐帯を形成し，実現したかを明らかにする．	国際交流学習に関わる学校２校と教員（人数不明）	面接，参与観察，会議メモ，メールスケジュール調整の経緯	国際交流学習を実施する教師とその実践に関わる関係者の水平的な紐帯には，「活動の間接横断」「内省を促す働き」「新しい活動の創出」の３つの特徴があった．
17	石上他，2011	研究論文	稲作体験活動への参加による学び	小学校，大学課外活動	セッション企画・運営	体験活動の参加を媒介とした学びの生成・成立過程を明らかにする．	セッション参加回数12回以上の16名（子ども11名，チューター５名）	参与観察，面接	発話カテゴリーは子どもは９個，チューターは16個抽出された．子どもの発話カテゴリーは「感想」「事実」が全体32%，子どものみに生成したものは「周辺的関心」で」，チューターの発話のみに生成したカテゴリーは「目標の設定」「体験の推量」「期待」「体験の転移」「疑問」「役割」「困難さ」「不安」で，子どもよりも多く多義的であった．
18	伊藤他，2014	記載なし	子どもを中心とした地域創造のための協働学習：平成25年度八幡子ども会議の事例を中心に	中学校課外活動	分析に理論的枠組みを活用	子ども会議中学生版の活動に焦点化し，提言が創出される過程の特徴を明らかにする．	子ども会議１グループ（中学生班）6名，大学生２名，指導主事１名	活動の映像からトランスクリプト作成，市長への提言の構成過程を収集（各参加者の役割を分析）	提言の創出は，断片化していた「テーマ設定理由」「これまでの活動から学んできたこと」「提言したいこと」「松花堂弁当」を結び，ストーリーを構築する作業であった．子ども会議委員の役割は「現状（問題点）の分析」「アイデアの提案」が中心で，大学生は進捗に応じ，リーダーやメンバーとして環境づくりを行い，支援した．指導主事は教職経験に基づいた介入を行い，活動に自身の学びを見出し，意味づけていた．
19	今野他，2011	ショートレター	活動理論から見た知識生産の新しい様式とその実践	中・高校大学課外活動	分析に理論的枠組みを活用	ICTを活用した教育システム開発と評価を拡張的学習理論の枠組みで捉え，知識生産のプロセスを考察する．	協働学習用ツール開発に関わった大学２校，中・高校１校で中心的な役割を担った人（人数不明）	参与観察，面接調査	協働学習用ツール開発に関わった活動システムの主体は，「翻訳精度が低い多言語NOTAを活用した異文化コミュニケーションの実践」という共通目的「対象3」に向かいながら，自らの活動システムの目的「対象1」を見直し発展するプロセスを示した．
20	石上他，2012	記載なし	教員志望大学生の体験による学び	大学課外活動	セッション企画・運営	教員志望大学生の体験による学びの特徴を構造化し教育的意義を検討する．	教員志望大学生37名，二次調査は一次調査協力者で中核的役割の５名	簡易面接，簡易質問紙調査，中核的役割の協力者に面接調査	「体験による学び」には一次的学び（過去の体験についての話者の自己内省が完了し既に意味づけられた語り）と，二次的学び（面接者との相互的行為で話者の内化が促進され新たに意味づけられた語り）があった．

表５　学習の場と活動理論の活用方法に関する文献の概要【学習の場が「学校以外の場」である文献 n＝4】

文献番号	著者，発表年	論文種類	研究テーマ	学習の場	活動理論の活用方法	研究目的	対　象	研究方法	主な結果
21	木下他，2012	記載なし	活動理論を用いた効果的なリーダーシップ研修の検討：看護師長の支援のあり方を探る	看護師研修会	研修会企画・運営	研修生の取り組みと支援の状況から，看護師長の効果的な支援のあり方を探る．	リーダーシップ研修生22名と所属部署の看護師長14名	質問紙調査	看護師長の事前動機づけを研修生40%が認識していなかった．夢の活動を描く段階の困難点は，研修生では「道具」「分業」が上位を占めたが，看護師長は「夢の具体化」「道具の設定」でズレがあった．「看護師長の助言や励まし」は研修生のモチベーションを維持していた．
22	榛葉他，2015	記載なし	卒後から，一人前ナースになるまでの学習過程（その1）	看護師職場	分析に理論的枠組みを活用	看護師が一人前のナースへと発達してきた学習過程や状況を明らかにする．	同じ病院に継続勤務する経験年数３～５年の看護師６名	半構成的面接調査（３つの媒介項（道具，ルール，分業）に分けて分析）	現場の活動＝学習は，活動理論の構造上最も重視される共同体が知識生成源となり，看護師らは非公式の隙間の共同体を作り，活動＝学習を発展させ，共同体の参加を促し，現場適応する一人前のナースへと育っていた．
23	香川他，2016	研究論文	「越境的対話」を通した新人看護師教育システムの協働的な知識創造：活動理論に基づくアクションリサーチと対話過程の分析	看護師新人教育システム	プロジェクトの設計考察	教育システムのプロジェクトを設計する．知の構造に伴う参加者間の関係性・相互行為の変容過程を分析する．	教育担当者３名１組と２名１組，プリセプター３名２組，執行部２名１組	グループ面接 越境的対話プロジェクト設計と実行，音声・録画データを収集	文脈（相互行為の質）が変異する中で，研修が異なる角度から語られ再構成されて新たな知が生まれる過程が示された．その際，対象志向性に関するコミュニティ間の矛盾が現われた．対象内の矛盾やコミュニケーションの矛盾，それから成る向創造と脱創造の矛盾が随時現われ，諸矛盾を乗り越える中で新たな知「新案」が形成された．
24	古川，2017	記載なし	日本語教師の悩みとその変容：他機関に所属する教師同士の対話の効果	日本語学校教師間対話	分析に理論的枠組みを活用	日本語教師の悩みや課題に対する教師同士の対話の効果を考察する．	主に留学生を対象とする日本語教師29名，事後面接４名	質問紙と面接 Steps for Coding and Theorization，活動モデルで分析）	「困ったり悩んだりした経験」で最も多かったのは学習者への対応で，他に学習者の授業態度，出席指導，学習者の国籍比の変化があった．異なる教育機関に所属する日本語教師間では，一人の日本語教師として対話ができること，対話から共感を得たり相違を感じたりでき，各機関へのフィードバックの可能性がわかった．

「学習の場」別にみると，「学校」において最も多い活用方法は「分析」に活動理論の理論的枠組みを活用したものが6件で，次いで，多い順に「授業設計」4件，「教材開発」3件であった．

「課外活動の場」では「分析」に活用したものが3件で，「セッションの企画・運営」は2件で活用されていた（表2）．

学習の場が「学校以外の場」では，「プロジェクト設計または研修会の企画・運営」と「分析」に活動理論の理論的枠組みを活用したものがそれぞれ2件ずつであった．

看護教育全体でみると，対象文献における活動理論の理論的枠組みを活用したものは5件で，「プロジェクト設計または研修会の企画・運営」が2件で，その他，「授業設計」「分析」「考察」における活動理論の理論的枠組みの活用がそれぞれ1件ずつであった．これらのうち，看護基礎教育における活動理論の活用は2件で，「授業設計」に活用していたもの1件，「考察」のみに活用していたものが1件であった．

Ⅳ．考　　察

本研究では，2011年から2018年までに発表された国内文献において，活動理論が活用されている「学習の場」と活動理論の「活用方法」について分析を行った．

まず，活動理論が活用されている「学習の場」について考察する．学習の場として「学校」が多い理由は，活動理論が学習理論として日本に普及したためと考える．監訳者の山住（1999）によると，エンゲストロームの『拡張による学習』（Engeström，翻訳．1999）は，「ヴィゴツキーの理論を背景にしつつ，教育研究・発達心理学・認知科学・学習理論における社会的構成主義，状況論的アプローチ，社会文化的アプローチと連携するかたちで，学びと教育と発達の文化-歴史的活動理論を本格的に検討する機会の創出を照準とした」と述べている．教育研究・発達心理学・認知科学の分野においての学びと教育の発達の検討に照準されたことから，教育関係者に広く浸透したと推測する．また，学習指導要領による要因も大きいと考える．『拡張による学習』（Engeström，翻訳．1999）の日本語訳発刊は1999年であり，学習指導要領（1999）が改訂され，自ら学び，自ら考える力等の「生きる力」の育成や，教科横断的な学びの場の検討が必要な「総合的な学習の時間」が新設された時期である．これらの状況において，学習者が「どのようにして学習活動を行うのか」「何を学ぶのか」「何ができるようになるのか」の手がかりとなる活動理論的なアプローチは有用であったと考える．文献検索期間の条件とした2011年から2018年においても，学習指導要領改訂があり，2011年度から実施された．主要テーマであった「生きる力」の育成や，基礎的・基本的な知識・技能の習得，思考力・判断力・表現力等の育成―例えば，学習指導要領によると，指導内容の充実，小学校外国語活動の導入，体験活動の充実，道徳教育の充実等―によって，対象文献の白土他（2017）の研究に代表されるように，活動理論を研究活動に援用することは重要であったと考える．対象文献の他にも，例えば，橋本（2015）は「空き缶和太鼓づくり」の実践事例を分析し，学校・地域・産業の協働によって学習を拡張させたと報告しており，学習の場においては，学校から離れ，課外活動が推進される動きがあるといえる．

一方，学習の場が「学校以外の場」の対象文献では，看護師の職場学習に関するものもあった．エンゲストロームによる先行研究にも，医療現場における活動をテーマとしたものがある．例えば，ヘルスケア施設における医者と患者との診療場面の調査（Engeström, 1993）や，子ども病院における患者ケア介入を容易にするための調査（Engeström，2000）があり，いずれもミーティング場面等の対話の分析が行われている．本研究の結果において，看護師の職場学習が3件みられたことには，2008年に発行された雑誌『インターナショナルナーシングレビュー』第31巻5号において，「状況論がひらく看護」として特集が組まれたことも要因のひとつであると考えられる．なかでも，「調査研究編」として，杉万（2008）は，中堅看護師研修における研究を題材に活動理論をどう使ったらよいかを紹介している．対象文献の木下他（2012）研究では，杉万（2008）を参考としており，影響があったことが示唆される．杉万（2008）は，「活動理論の最大の眼目は，一見，個人の行動にみえるものを，その個人を含むグループの活動として捉えていくこと」と述べている．杉万（2008）は，「主体は何らかのグループの一員として動いており，そのグループのあり方を変えれば，主体の行動も変わるというケースも数多い」とし，「主体を一部として含む大きなグループを視野に入れれば，主体の行動を変えるきっかけを見いだせる」と述べている．つまり，活動理論の枠組みを活用することによって，視野を拡大して活動システムに生じている問題状況を発見できるといえる．

また，2010年に，エンゲストロームによる『変革を生む研修のデザイン―仕事を教える人への活動理論』（翻訳．2010）の日本語訳が発刊されている．この書籍のコ

ンセプトとして，エンゲストローム（翻訳．2010）は，「さまざまな組織において，教育を計画し，成人や若者を教える人たちのガイドブックである」とし，「とりわけ，人材開発や研修のニーズに応えることを念頭に置いて書かれている」と述べている．エンゲストロームの活動理論が看護実践の場において身近な看護系雑誌や読みやすいかたちで紹介されたことは，看護師の職場学習において注目されることにつながったのではないかと推測する．

次に，活動理論の活用方法について考察する．本研究の結果では，全体的にみると，研究における「分析」に活動理論の理論的枠組みを活用したものが11件と多かった．これは，活動理論的なアプローチが研究方法として，「発達的ワーク・リサーチ」（Engeström，翻訳．1999）をとるためではないかと考える．発達的ワーク・リサーチとは，実践から歴史的で文化的な矛盾を分析し，新たな活動システムをデザインしなおすことを支援する介入の方法論である（Engeström，翻訳．1999）．したがって，学習活動の様相や過程を分析するために，活動理論的なアプローチが活用されたと考える．学習活動の場における活動システムを分析することにより，活動システムの諸要素のなかで何が学習活動の障壁となっているのかを可視化することができ，解決への手がかりや学習者の支援において取り組むべき課題について示唆を得ることができるといえる．

最後に，看護教育における活動理論の活用の可能性を考察する．看護基礎教育における対象文献において，活動理論の活用が少ないことが明らかになった．活動理論に関する文献を数量的に展望した木幡（2012）の結果においても，活動理論に関する国内文献の数は多くなかった．海外での活動理論を活用した研究をみると，Tuomi-Gröhn（2003）は，看護学生の実習で，学生と教師が実践者と協働することを通して，相互作用によって新しい学習活動の目的や方法，及び学習成果が生起したと報告している．また，Tsui & Law（2007）の教師教育における大学と学校のパートナーシップにおける境界横断の学習を分析し，学生の教育実習において，授業研究を行うなかで，活動システム間の矛盾を解決し，新しい活動システムを構成することにより，授業研究に関わる参加者すべての学習へと変容したことを明らかにした．また，Konkola, Tuomi-Gröhn, Lambertc, & Ludvigsen（2007）は，作業療法士の実習生が異なる活動システムをもつ病院スタッフや研究者等との協働によって，学生自身の発達・成長があったと述べている．このように，専門職をめざす学生の学習活動の分析に活動理論の理論的枠組みを活用したものはあるが，海外の先行研究においても，看護学生を対象としたものは少ないといえる．

しかし，数は少ないものの，看護基礎教育における学内から臨地への水平移動に伴う学習に焦点をあてた2つの研究の成果をみると，香川（2012）は，学内から臨地に移動する過程における学習者の変化や学習の成立を説明することに成功しており，澁谷他（2016）は，学習の移動を支援する学内演習の構築の可能性を提示している．看護基礎教育では，学内での学習から臨地実習での学習へと移動するという特徴的な学習形態で展開することが不可欠である．学習の場が変われば，学習活動における活動システムも必然的に異なり，これによって問題状況が生じている可能性もある．例えば，岡島，細田（2014）は，基礎看護学実習での看護物品の利用において，学生は「学内との違い」を認知したと述べている．つまり，学内での学習で看護物品を使う状況とは異なり，臨地実習における病棟での看護物品を活用することには物品の準備に時間がかかったり，グループメンバーの学生との時間調整が必要となったりする．また，病棟特有のルールの存在や，病棟の雰囲気による緊張感は，学生の看護物品の利用を躊躇させることもあったという．このような臨地実習による学習の場の移動を契機とした活動システムの変化は，学生に矛盾を生じさせるといえる．このように学内から臨地に移動することは学習活動において種々の矛盾を学生にもたらし，学習を停滞させる可能性もあるといえる．この課題を乗り越えて効果的な学習につながる支援をするためには，活動理論の枠組みを活用した教育方法が必要であると考える．

Y. Engeström, Engeström, & Kärkkäinen（1995）は，複数の活動システム間の境界を横切る水平的な学習を重要視し，専門知識の理解や獲得に有効だと述べている．すなわち，学習の場の移動で捉えた矛盾は協働的に解決へと取り組むことで，学習者自身の成長・発達の契機になるという．Engeström et al.（1995）は，これを「水平的な熟達」であると特徴づけている．つまり，学内学習から臨地実習の移動で生じた矛盾に対して，グループメンバーとの協働や，教員や指導者に支援を求めてアクセスしながら解決に取り組むことは，学生自身の学習活動を進化させる．この一見はっきりとは見えにくい学習活動は，活動理論の理論的枠組みを活用して分析することで可視化でき，学生に応じた必要な学習支援が提供することにより，学生が矛盾を捉えただけにとどまらず，水

平的な学習による学習効果を高めることができると考える．

エンゲストローム（翻訳．2010）は，「学習を理解し，よい教授を生み出すには，何よりもまず，学習の対象となる活動を理解する必要がある」と述べている．つまり，学生にとって効果的な学習の支援を検討するならば，学生の学習活動がどのように行われているのか，活動システムにおいて何が学生に問題状況を引き起こしているのかを分析することは重要であるといえる．また加登本（2011）は，エンゲストロームの活動システムの方法論は，学習集団の形成を解釈する方法論として有効で，学習集団の形成に影響を与える要因を考察し，教師の教育活動の再構築につながる可能性を示唆していたと述べている．看護基礎教育を取り巻く状況が変化するなかで，行動主義，認知主義，状況主義という複数の学習理論による影響が混在し，学内から臨地へと学習の場を移動する複雑な学習の形態をとる看護基礎教育においては，活動理論の理論的枠組みを活用して学習活動を分析し，明らかになった状況に適した学習活動を設計し実践していくことが求められていると考える．

Ⅴ．結　　論

2011年から2018年までに発表された対象文献24件を，活動理論が活用されている「学習の場」及び「活用方法」から分析した結果，以下のことが明らかになった．

1. 国内の先行研究では活動理論は「学校」における「学習の場」での活用が多く，なかでも「大学」「小学校」で多く活用されていたが，看護基礎教育を対象としたものは2件のみであった．
2. 活用理論の活用方法では，全体的にみると研究における「分析」に活用した先行研究が11件と多く，次いで，「授業やセッションまたは研修会等の企画・運営」に活用したものが8件であった．
3. 看護教育についての対象文献5件のうち，看護基礎教育では「授業設計」と「考察」に活動理論の理論的枠組みを活用したものが1件ずつと少なかったが，活動理論を活用する有用性が示されており，看護基礎教育での学習活動の分析や授業設計等における活動理論の活用可能性を検討する必要性が示唆された．

文　　献

Engeström, Y. (1999).（山住勝広，松下佳代，百合草禎二，保坂裕子，床井良信，手取義宏，高橋登，翻訳）．*拡張による学習―活動理論からのアプローチ*．東京：新曜社．

Engeström, Y. (2001). Expansive learning at work: Toward an activity theoretical reconceptualization. *Journal of Education and Work*, 14(1), 133−156.

Engeström, Y. (2010).（河井亨，翻訳）．*変革を生む研修のデザイン*．東京：鳳書房．

Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, M. (1995). Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities. *Learning and instruction*, 5, 319−336.

Greeno, J. G., Collins, A. M., & Resnick, L. B. (1998). Cognition and learning. In Berliner, D. C., & Calfee, R. C. (Eds.), *Handbook of Educational Psychology* (pp. 15−46), New York: Macmillan.

橋本忠和（2015）．伝統・文化教育に関わる造形活動の拡張的学習としての可能性についての研究：空き缶和太鼓づくりを事例として．*北海道教育大学紀要（教育科学編）*，66（1），253−268.

加登本仁（2011）．体育の学習集団研究の方法論としての活動理論．*広島大学大学院教育学研究科紀要*，1（60）．81−90.

厚生労働省（2007）．看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf.

厚生労働省（2011）．看護教育の内容と方法に関する検討会報告書．http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf.

厚生労働省（2011）．新人看護職員研修に関する検討会報告書．https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000012c7h-att/2r98520000012ckq.pdf.

木幡智子（2012）．活動理論に関する論文展望：学校図書館活動への応用に向け．*Journal of library and information science*，26，51−70.

Konkola, R., Tuomi-Gröhn, T., Lambert, & Ludvigen, S. (2007). Promoting learning and transfer between school and workplace. Journal of Education and

Work, 20(3), 211–228.

Lave, J., Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. New York: Cambridge University Press.

Leont'ev, A. N. (1980).（西村学，黒田直実，翻訳）. *活動と意識と人格*. 東京：明治図書.

文部科学省，厚生労働省(2008). 保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部を改正する省令の交付について. http://www.hospital.or.jp/pdf/15_20080108_01.pdf.

岡島規子，細田泰子(2014). 基礎看護学実習における看護学生のアーティファクトに対する認知. *日本看護学教育学会*，24(1)，1–14.

酒井明子(2010). 周手術期看護における見学と実習のコンテクストの理論的検討：活動システムモデルを用いて. 福井医科大学研究雑誌，1(1)，219–232.

杉万俊夫(2008). 中堅看護師研修における活動理論の実践. *インターナショナルナーシングレビュー*, 31(5), 50–54.

Tsui, A. M. & Law, D. K. (2007). Learning as boundary-crossing in school–university partnership. *Teaching and Teacher Education*, 23, 1289–1301.

Tuomi-Gröhn, T. (2003). Developmental transfer as a goal of internship in practical nursing. In Tuomi-Gröhn, T. & Engeström, Y. (Eds.), *Between school and work* (pp199–231). UK; Earli.

中央教育審議会(2008). 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf.

中央教育審議会(2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ(答申).
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf.

中央教育審議会大学分科会将来構想部会(2018). 今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ・http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/icsFiles/afieldfile/2018/07/03/1406578_01.pdf.

山住勝弘(2015). 子どもの主体的な探究学習と概念形成：UCLAラボスクールにおける授業実践の活動理論的分析. *カリキュラム研究*，24，41–53.

Vygotsky, L. S. (1978). Mastery of memory and thinking. In Cole, M., John-Steiner, V., Scribner, S. & Souberman, E. (Eds.), *Mind in society: The Development of Higher Psychological Process* (pp. 38–51), Massachusetts and London: Harvard University Press Cambridge.